

「東スラヴ文化圏の
領域横断的研究」
セミナー ②

講師：オリガ・ホメンコ

(東京外国語大学 国際日本研究センター特任研究員
キエフ・モヒラアカデミー国立大学准教授)

「独立後の
現代ウクライナ文学」

2018年7月9日 (月)

15:00 - 17:00

東京外国語大学 総合文化研究所 会議室

科研(B)「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの交錯 —
東スラヴ文化圏の領域横断的研究」(代表:沼野恭子)

【セミナー報告】
独立後の現代ウクライナ文学：プロセス、ジャンル、人物
オリガ・ホメンコ

1. 変化が激しい 90 年代：大事な役者としての「ウクライナ語」の登場と演技力

27 年前の 1991 年 8 月 24 日にウクライナは 2 回目の独立を宣言し、独立共和国として存在し始めた。実際には最初の独立宣言は 1917 年 3 月。ということは、今年でウクライナの独立の歴史は 100 年を超えていることになる。1991 年の独立より前、1986 年 4 月 26 日にチェルノブイリ事故があつて、それがウクライナの自立に大きな影響をもたらした。その時に情報を隠して、国民に本当の話を伝えずに事件をごまかそうとしたからだ。ウクライナの人はモスクワの政府を信用できないと強く思った。ウクライナの歴史家のセルヒー・プロヒーによれば、原発問題、独立運動とウクライナ文学は見えないところで強く結びついている¹。1960 年代には、ウクライナで原子力発電所をつくるのは極めて文明的な動きであると、当時のウクライナの作家や詩人は思っていた。ところが、ほぼ同じ人たちが、チェルノブイリ事故が起きてからウクライナ語を公用語にする運動を進め、反原発的な動きをみせながら「ナロードニイ・ルーフ」(Народний Рух) (民主的な運動) をすすめ、社会運動として生まれ、政党につながった「ゼレーニイ・スウィット」(Зелений світ) (緑の世界) を設立している。

つまり、原発事故でモスクワの政府に見捨てられたウクライナ人インテリのアイデンティティが強くなったとも言えるわけで、あの事故で初めて自分で自分のことを考え、問題を処理をしなければならなかったと感じたわけだ。それでも、チェルノブイリから独立まで 5 年もかかった。70 年間も続いていたソ連から簡単に脱却できなかったからだ。1980 年代後半には、弱体化していたソ連に経済的な混乱が加わって様々な大変な状況があつて、新しい意識形成にも時間がかかった。ウクライナではその変化を、1960 年代に現れた若い詩人や作家達がリードしたとも言える。1960 年代には彼らが少し自由な雰囲気味わって文学の上では色々な新しい話題に触れたのだが、70 年代と 80 年代のブレジネフ時代には圧力が強まり、「停滞の時代」でしばらくは動くことはできなかった。それがチェルノブイリ事故によって、色々なところで急遽、新しいスタートが切られた。ウクライナの独立はある意味で 1989 年 10 月に決まった「言語法」²によって土台ができたとも言える。その法律に基づいてウクライナ共和国ではウクライナ語が公用語になっ

¹ Plokhii Serhii, *Chernobyl: The History of Nuclear Catastrophe*, Basic Books, 2018.

² <http://zakon.rada.gov.ua/laws/show/8312-11>

た。それはまたウクライナ作家協会、ウクライナ語協会などの民衆の力で決まったとも言える³。その法律によって 2000 年までのウクライナ語教育のプログラムなども決まった。この法律はジョージア、バルト 3 国にもあった民衆的な動きとの連続性ももっていた。

「言語法」はウクライナ文学に恵まれた社会環境を作って、新しい時代を切り開いたとも言える。また、独立とともにソ連時代に忘却させられた 20 世紀はじめのウクライナ文学の多くの作品が、1990 年代前半に舞台裏から表に出てきた。例えば、それまで過去の政治的な活動が理由でまったく表に出ることがなかったヴォロディミル・ウインイチェンコ(Володимир Винниченко)⁴、ミコーラ・ヒフィリョウイイ(Микола Хвильовий)⁵、エフゲン・マラニューク(Євген Маланюк)⁶、ミコーラ・ゼロフ(Микола Зеров)⁷、ミハイリ・セメンコ(Михайль Семенко)⁸などの名前が挙がり、また、まったく知られていなかったパフロー・ティチーナ(Павло Тичина)の作品（特に“Сонячні Кларнети”⁹という詩集）が紹介されるようになった。もちろんソ連時代にもウクライナ文学は発展していたが、検閲があって話題やテーマが決まっていた。それでもオレーシ・ホンチャール(Олесь Гончар)¹⁰パウロー・ザグレベルニイ(Павло Загребельний)¹¹リーナ・コステンコ(Ліна Костенко)¹²、ドミトロー・パフリチコ(Дмитро Павличко)¹³、ヴォロディミル・ヤヴォリーフスキ(Володимир Яворівський)¹⁴などの素晴らしい作家や詩人が出てきた。特に詩人たちは、圧力がかかっても密かに活躍をしていた。

その作家たちが独立直前、そして特に独立後は様々な民主主義的な変化をもたらすエンジンにもなったと言える。スラブの世界で作家や詩人は昔から文学的な存在を超える役割を果たしていた。人に真実を伝え、また人を動かす力も多く持っていた。それが独立後のウクライナでは特にそうだった。1960 年代に活躍していた作家や詩人、イワン・ドラチ(Іван Драч)、ドミトロー・パフリチコ(Дмитро Павличко)、作家のヴォロディミ

³ <http://litopys.org.ua/ukrmova/um163.htm>

⁴ В. Винниченко. Чорна пантера і білий ведмідь. Драми, Знання, Київ, 2014.

⁵ М. Хвильовий. Твори у двох томах, Київ, 1990.

⁶ Є. Маланюк. Поезії, Дніпро, Київ, 1992.

⁷ М. Зеров. Вибрані твори, Смолоскип, Київ, 2015.

⁸ М. Семенко. Вибрані твори, Смолоскип, Київ, 2015.

⁹ П. Тичина. Сонячні кларнети, Дніпро, Київ, 1990.

¹⁰ О. Гончар. Собор, Дніпро, Київ, 1989.

¹¹ П. Загребельний. Диво, Махаон, 2000.

¹² Л. Костенко. Неповторність, Молодь Київ, 1980; Л. Костенко. Вибране, Дніпро, Київ, 1989.

¹³ Д. Павличко. Час. Поезії, Київ, 2010.

¹⁴ В. Яворівський. Твори у 5 томах, Фенікс, Київ, 2008.

ル・ヤヴォリーフスキ(Володимир Яворівський)は、文学活動を続けながら国会議員にもなり政治家にもなった。

「言語法」が定められてから、1990年代の文学作品の主役、大事な主人公は「ウクライナ語」であったとも言える。つまり、それまで公用語になれなくて抑圧された言葉が初めて人の前にでてきて、解放されて自由を味わいながら大活躍するようになった。その時代にユーリ・アンドルホービチ(Юрій Андрухович)の「Московіада」¹⁵、「Перверзія」¹⁶、エフゲン・パシュコフスキ(Євген Пашковський)の「Вовча зоря」¹⁷、オレーシ・ウリャネンコ(Олесь Ульяненко)の「Сталінка」¹⁸、オクサーナ・ザブージュコ(Оксана Забужко)の「ウクライナのセックスのフィールドワーク」¹⁹、ユルコー・イズドリク(Юрко Іздрик)の「Воццек」²⁰、ステパン・プロツク(Степан Процюк)の「Шибениця для ніжності」²¹という作品が現れた。

この時代に言語は自己表現の装置になり、言葉は自分のアイデンティティと強く結びついた。言葉によって自分の存在を確認できて、自分の国の存在感をアピールするようになったわけだ。1863年7月にロシア帝国でウクライナ文学を禁止したヴァルナーエフ法から考えると、長い間抑圧されていたウクライナ語が初めて解き放たれて自由に振る舞えるようになった。歴史的にみると、特に英語、フランス語、あるいはロシア語で書かれた文学と比較して、ウクライナ語で書かれたウクライナ文学の「在庫」はまだそれほど多くはない。そのため文学の言葉のヴォキャブラリーも、特に英語やフランス語と比べたら、まだ少なく、これから増やすべきだろう。そして自分たちの文学の存在感をアピールするために、これから作品のジャンルや量ももっと増やされるべきだろう。

1991年にウクライナはあまりにも平和的に分離独立したので、体は離れても心が宗主国から離れていないところもあった。つまり、昔の「親分」であったソ連＝ロシアから精神的にまだ十分自立していなかったもので、その後、2004年にはオレンジ革命、そして2014年にもまた政変が起きた。つまり、ソ連時代の「帝国主義の過去」をまだ処理し続けているわけだ。独立後のウクライナ文学発展については、タマラ・フンドロワ²²、ヤ

¹⁵ Ю. Андрухович. Московіада, Київ, 1993.

¹⁶ Ю. Андрухович. Перверзія, Київ, 1996.

¹⁷ Є. Пашковський. Вовча зоря, Молодь, Київ, 1991.

¹⁸ О. Ульяненко. Сталінка, Дофін Сатани, Київ, 1996.

¹⁹ О. Забужко. Польові дослідження з українського сексу, Київ, 1996.

²⁰ Ю. Іздрик. Воццек, Лілея-НВ, 1997.

²¹ С. Процюк. Шибениця для ніжності, Джура, Тернопіль, 2001.

²² Т. Гундорова. Післячорнобильська бібліотека. Український літературний постмодерн, Критика, Київ, 2013.

ロスラフ・ポリシュチュック²³、ロクラナ・ハルチュック²⁴などの多くの研究者によって書かれている。

文学評論家のヤロスラフ・ポリシュチュック(Ярослав Поліщук)は独立後のウクライナ文学発展のプロセスを分析する中で、社会的(社会主義から資本主義へ)、経済的(自由市場への変化、本の出版や販売システムの変化)、またイデオロギー的(作家は初めて政府の圧力から脱出できたこと)な理由を述べている²⁵。そして独立後の文学が全て「ポスト」という傘の下で発展していくと主張している。つまり、ポストソ連、ポストコロニアル、ポスト全体主義、それからポストロシア語ということだ。またタマラ・フンドロワ(Тамара Гундорова)という文学評論家も、植民地論に基づいて独立後のウクライナ文学を分析している²⁶。それによるとウクライナ文学は、「植民地の過去」、また「植民地の意識」を卒業するのに時間がかかりすぎてまだ十分できてはいない。ウクライナ文化はまだまだその処理をし続けているため、「トランジット文化」とも呼べる状況である。地理的なポジションと政治的な過程によって色々支配されているため、独立後のウクライナ文学はおそらくポストコロニアル的な障害を受けた文学でもあるのだ。つまり、古いシステムが崩れて新しいシステムがまだ成り立ってない中で、人々は苦労して一生懸命生きているのだ。また過去にあまりにも大きなトラウマ的な経験があって、それが将来までに影響して、「現在」を味わえないままでやり過ごす一方である。また宗主国に対する怒りと軽蔑があって、そこからしばしば自分の被害者意識に埋没することになる。つまり、植民地時代を卒業しても、そのあとの処理に時間がかかり、いつまでも「トランジット状況」にいる。文学はある意味で社会の鏡であるため、それがウクライナ文学にもよく現れるというわけだ。

また、フンドロワによると、トランジット文化の特徴は変化中であること。つまり、いつまでも新しいものを受け入れられるキャパシティもある文化だ。コロニアルな時代にあった「厳しい父親が決めた法律」が崩れ、その下にいる「子供達」がいろんな反発をしながら新しいルールを探し続けている。さらに、この変化する状況の中で色々な反発があって、「怒り」も感じて宗教や道徳観と戦うことでストレスを発散する。そして家族での自分の立場のために女性が戦う、上の世代に対して下の世代が戦うという現象

²³ Я. Поліщук. Українська література періоду незалежності: тенденції розвитку// “Українська літературна газета” 12 січня 2016. Режим доступу: <http://litgazeta.com.ua/articles/ukrayinska-literatura-periodu-nezalezhnost-tendentsiyi-rozvytku/>

²⁴ Р. Харчук. Сучасна українська проза. Постмодерний період, Видавничий центр “Академія”, Київ, 2008.

²⁵ Я. Поліщук. Українська література періоду незалежності

²⁶ Т. Гундорова. Транзитна культура, Грані Т, Київ, 2013.

もある。昔ながらのルールが崩れて、新たなルールを決めるためにそれまでに参加しなかった様々な役者や参加者が関係してくる。世代的なコンフリクト、社会的なコンフリクト、またチェルノブイリ事故から生まれたものなども文学作品の話題になる。そして文学の上で「過去」と「現在」の戦いが人間（または主人公）の「体」の上で行われている。つまり、「私」と「他の世界」、「他者」、「体とその周りにある環境」、また、「変化するものと変化しないもの」、家族と個人、男性と女性のコンフリクトがテーマとして表現される。そして理想と現実のあいだにはいつも「ギャップ」があって、その小さな隙間で新たな「もの」が生まれる。例えば、こうしたポストコロニアルな状況の中で高い文化と低い文化（キッチュ文化や文学）が生まれるとタマラ・フンドロワは考える。そのため、絶望感も手伝って、2000 年までの文学作品の主人公には「負け組」が多いのだ。だが、2000 年以降になると作家がより現実を「体験する」「味わう」ようになって、それを文学作品にするようになってくる。また、フンドロワによると、ウクライナ文学のポストモダンな展開においてチェルノブイリの事故は大事なポイントであって、それに非常に影響されたものでもあった²⁷。

2. 独立後：もっとも本を読む国から本を買わない国へ？本に対する思い、本の販売状況

ソ連時代に、「ソ連がもっとも本を読んでいる国」というスローガンがあった。たしかに出版業界は盛りあがっていた。また本の値段も安かったので誰でも買えた。検閲の関係で出版される作家や作品が決まっていたが。独立後は民間出版社が増え、自費出版という選択もあって、今まで出版できなかったものもたくさん出版された。また、読者にとっても出版された本の選択肢が増えて、お金を払って好きな本を自由に選ぶことができる気がした。そして本の値段も上がって、高くて買えないという状況にも気づかされた。

デジタル時代が進む中で、「本」に対する思いが変わったとも言える。昔は本を集めていた。ソ連時代は面白い本をなかなか買えなくて、全集は予約制というシステムもあったので、本が家にくるのはとても楽しみなことだった。また、政治的な理由で「禁止されていた」本もあったので、本というものは少し危険なものという雰囲気もあった。キエフでは 1980 年代後半から 90 年代前半に、毎週末に公園で本の青空市があった。本を好きな人はそれを楽しみにした。公園で本を販売することから、今でも存在しているペトリフカ地区で本を売る公式的な市場ができた。つまり、本を大事にしていた。他人の家に行って本棚を見れば、その人の勉強のレベルから「階層」まで読み取ることがで

²⁷ Т. Гундорова. Післячорнобильська бібліотека.

きた。

デジタル文化が進む中で、今の 10 代や 20 代のウクライナ人は日本人と同じようにあまり本を読まない。しかもペーパーレスの人が多いのだ。教科書でも本でも iPad リーダーなどで読むことが多いのだ。小学校にも、iPad を準備してくださいという条件のあるところが最近よくあるようだ。

また 1990 年代から 2000 年代に入るまでに経済的に大変な混乱が進んでいたのも、「花より団子」と、お金を稼ぐことに一生懸命の人も多かった。今でもその状況はあまり変わらない。例えば、ドイツで毎年 10 万点の新刊がでていますが、ウクライナでは 2 万点だけだ。2012 年には年間 38 万ユーロが本の購入に使われた²⁸。それはドイツの 100 分の 1 だ。人口 4600 万の国には少ない。まだ経済的に恵まれていないウクライナ人には本を買うお金もない、と言う本屋さんもいる²⁹。

また、経済的な理由で、よく整っていた図書館のシステムを支えられなくなった。大学の図書館はまだ頑張っているところが多いのだが、地域の図書館はお金がなくて本を買えず、若者たちは魅力を感じなくなった。区などの地域の図書館に行くと高齢者しかない。

そしてインターネットやポップカルチャーが普及して、若者がそこにはまって図書館に行かなくなった。ネットで短い映像を見ながらファスト消費をしている中で、本を読む努力をしたくない若者も多いのだ。

独立後は本の販売事情やルートも変わった。本屋さんが増えた一方で、郵便、配送便、あるいはネットで本を売るサービスも普及した。アマゾンのようなサービスはまだウクライナには存在していないが、yakaboo というネットショップが現れた³⁰。しかし全国には拡大できなかったようだ。

また、デジタル化が進む中で新しい本のフォーマットが現れた。デジタルブックもあるし、オーディオブックもある。CD やネットで本を聞けるようになった。

そして国の検閲がなくなって、イデオロギー的に出せなかったものも出せるようになったが、逆に 1990 年代に入ってから出版される本のレベルが落ちた時期もあった。また最近のウクライナでは読書する人が減っているとメディアもよく騒ぐ³¹。それによると、やはり経済的な理由が一番にあげられている。実際はどういう本が買われているかを調べると、子供の本、歴史小説、そして専門図書という順番になる。

2000 年代に入ってから新しい現象として出てきたのはブックフェスタ、ブックフォー

²⁸ <https://tyzhden.ua/News/42913>

²⁹ <https://tyzhden.ua/News/42913>

³⁰ <https://www.yakaboo.ua>

³¹ <https://www.radiosvoboda.org/a/26818254.html>

ラムのようなイベントだ。なかでもキエフで5月に行われるアルセナーレ³²と9月にリヴィウで行われるブックフォーラムのふたつが大きい。両方共とても人気があるイベントで、2017年のアルセナーレでは5万人³³、リビフのフォーラムには1万5千人³⁴が参加したという。イベントでは本のプレゼンテーションだけでなく映画の上映、コンサート、劇のような様々な文化的なイベントも行っている。

だが、このふたつの大きなイベントのせいで作家にもプレッシャーがかかっている。出版社にとって売り上げが一番で、ゆっくり作品を熟成させて書かせるのではなく、フォーラムに合わせて完成することも必要になってくる。頑張って毎年新しい作品を出さなければならないとプレッシャーを感じる作家もいる。

3. 作家の存在感と作家になれるまでの道：作家たちはどうしているのか？

ソ連時代の作家たちは文学部か文学大学を出て、いくつかの作品を出してから作家協会に入って活躍していた。作家協会に入れてもらえば国から「作家」として認められて活動もある意味で保証されていた。しかし独立してから状況が変わった。

まずは、経済的な能力さえあれば自分で本を書いて自費で出版することができる。また、お金がなければ民間の出版社を回って自分の本を出版してくれるところを見つける。あるいは、まだ本を書いていなくても、エッセイや短編などの作品を«Кур'єр Кривбасу»³⁵、«Дніпро»³⁶、«Березіль»³⁷、«Київ»³⁸、«Дзвін»³⁹、«ШО»といった文学雑誌に送って掲載してもらうこともできる。1999年から2008年まで«Четвер»という雑誌も活動していたが、もうなくなった⁴⁰。またソーシャル・メディアで読者を増やそうとして頑張っている場合もある。

評価されて文学賞をもらうという道もある。ソ連時代の1961年からウクライナにはシェフチェンコ賞がある⁴¹。文学以外にジャーナリズム、音楽、演劇、映画、ビジュアル・アートという6つの部門がある。国の一番大きな賞でしかも国民的英雄である詩人のタラス・シェフチェンコの名前を冠しているので、国の文化に大きく影響した人しかもらえない。しかも1回しかもらえない。独立後のウクライナでは民間の新しい文学賞

³² <https://artarsenal.in.ua/uk/knyzhkovyj-arsenal/2018-2/>

³³ <https://artarsenal.in.ua/uk/povidomlennya/knyzhkovyj-arsenal-vidvidaly-ponad-50-000-lyudej/>

³⁴ <http://bookforum.ua/post-reliz/>

³⁵ <http://courier.at.ua>

³⁶ <http://www.dnipro-ukr.com.ua>

³⁷ <http://berezil.kh.ua>

³⁸ <https://www.facebook.com/kyivmagazine>

³⁹ <https://www.facebook.com/dzvyn1940>

⁴⁰ <http://archive.chytomo.com/interview/izdrik-literatura-z-visokoi-polici-ne-vsim-potribna>

⁴¹ <http://www.knpu.gov.ua>

も現れた。一番話題になる文学賞は、2005年に設立されたイギリスBBCのウクライナ語放送の文学賞⁴²と、テチャーナとユーリイ・ローグシュの家族がスポンサーになって1999年に作った「コロナツィヤ・スローワ」⁴³という賞である。BBC賞は大人向けと子供向けの部門があって、コロナツィヤは小説（長編）、歌詞、映画の台本、舞台の台本という部門もある。BBCの賞金は1000ポンドで、コロナツィヤはの最大の賞金は2万グリブナである。

今のウクライナでは、普通に出版社と契約をして出版してもらう場合は、2000部出してもらえればいいほうだ。また、最初の本を出すときにほぼお金をもらえない作家が多い。そして著作権はほとんどの場合、5年間で出版社のものになる。いくつかの本を出したあとは、出版社との交渉次第で売り上げの5-10%をもらうことができる。だが出版社にもいろいろあって、作家に言わないで増刷するところもある。確かに出版した本の冊数を作家が確認することはできない。また、自分の文学エージェントを持っている人も殆どいなくて、全部自分でやる人も多い。

だが、資本主義の時代になって作家が自費出版できるようになったのは、ひとつの逃げ道でもある。ただし自費出版しても販売も自分でしなければならない。ウクライナの書店はほとんど個人との契約を結ばないので、個人での販売は難しい。

作家が自分の本を出版して食べていけるのかはとても微妙だ。まずはウクライナでは10万部の本を出せる人は非常に限られている。歴史小説のマリヤ・マティオス（Марія Матиос）、ワシーリー・シュクリャール（Василь Шкляр）がそのよい例で、この2人の作品は学校の教科書にも採り入れられている。それ以外に作家活動と出版で食べていけているのはセリヒー・ジャダン（Сергій Жадан）、アンドレイ・クルコフ（Андрей Курков）、オクサーナ・サブジュコ（Оксана Забужко）、ユーリー・アンドルホビチ（Юрій Андрухович）、リュウコ・ダシュワール（Люко Дашвар）、アンドリイ・ココチューハ（Андрій Кокотюха）、イレン・ロズドブジコ（Ірен Роздобудько）くらいだ。他の作家たちは生活を成り立たせるために他の仕事を持ち、さまざまな支援を受けることもある。

4. 読者会の過去と現在：自分を売りこむ時代へ

ソ連時代によくあった「読者会」は独立後はしばらく減っていき、作家が読者とコミュニケーションを取ることのできる「場」がなくなった時期もあった。1990年代や2000年代に入ってから、地域の図書館には特に学校を対象に作家との読者会を開くことに力を入れるところも多かった。

⁴² https://www.bbc.com/ukrainian/topics/book_award

⁴³ <http://koronatsiya.com>

だが、2010 年に入ってから現れた新しい若手作家はデジタルメディアに詳しい一方で、やはり読者と触れ合うリアルな機会も作りたいということで、新しいかたちの読者会が普及してきた。そこには「作家と読者のふれあい」という以外に経済的な理由もある。若い作家は自分の能力をお金に変えるために、教師、新聞記者、PR 活動家など、様々な仕事をしなければならない。最近、彼らのあいだでは自分の作家のスキルをお金に変えるために「1 週間で小説がかける」という有料ワークショップを開いて稼ぐことが流行っている。このような講座をカテリーナ・バブキナ(Катерина Бабкіна)やマルク・リビン(Марк Лівін)という若い作家たちがよくやっている。

また自費出版の話に戻ると、初めての本から自分の能力を金銭化する面白い事例もある。それがオリガ・コトルシ(Ольга Котрус)の本の自費出版の例だ。彼女は以前パリに住んでいた経験を最初ブログで書いて話題になり、パリで特別ツアーもやることもあった。そのあと、キエフに戻ってパリについて書いたものを『私を食べてしまった町』という本にした。その本の値段を 10 ユーロほどにしてフェイスブックで広告し、予約制にした。そして予約金を資金源として自費出版をした。それが成功して数ヶ月後には増刷(再出版)もした。2018 年 12 月には、「どうすれば自分で本を出版できるか」という有料ワークショップもやっている。

20 代、30 代の作家は古い世代と違ってお金に対する意識がしっかりしている。そして作家活動や読者とのふれあいをビジネスとして考えている。読者会も有料で行うことも多い。また、フェイスブックなどのソーシャル・メディアで広告をし、書店や共同スペースを借りて、読者会や詩の朗読会を行なっていることも多い。

書店の状況も独立してから変わった。ソ連らしい、店員がいてその後ろに本が本棚に並んでいるという書店が減って、自由に見て回れて好きな本を手にとることのできるオープンスペースの書店が増えた。成功した事例としては、ウクライナ語の本を中心に全国で販売する Книгарня Є (Є という本屋さん)⁴⁴がある。実際の店舗もあり、ネット販売も行なっている。

また、文学クラブのような喫茶店も出てきた。2001 年以降に設立された Остання барикада という文学・音楽クラブはその一つだ。1990 年にウクライナの都市文化を普及するために元学生運動家、国会議員のオレーシ・ドーニイが作ったものである。それが 2003 年に政治的な理由で閉鎖された。今は同じ名前のウクライナ料理の店だけが残っていて流行っている⁴⁵。

また、2004 年にオープンした「クピドン」も多くの文学イベントをやっている⁴⁶。こ

⁴⁴ <https://book-ye.com.ua>

⁴⁵ <https://borysov.com.ua/uk/ostannya-barykada>

⁴⁶ <http://www.kupidon.ho-de.kiev.ua>

のクラブ式レストンランのスローガンは「ウクライナのインテリの最後の隠れ家」だ。考えてみると、同じプーシキンスカ通りの向かい側に 1970 年代から 90 年代後半にかけて、お酒が飲める喫茶店付きのスーパーがあった。その前にいつもテーブルが並んで、夏から秋にかけて、よくそこでウクライナの作家や詩人たちがコーヒーやお酒を飲んでいた。「クピドン」はすぐ近くにあってその伝統を受け継いだとも言える。

またその数年前にオープンした「ドット・コマ」⁴⁷という文学パブもあって、そこでもいろんな文学や音楽的なイベントを行なっている。

独立後の作家組織のことにも触れておこう。独立後にそこでも様々な変化があった。ソ連時代からの作家協会があるが、様々な出来事があって評判が悪くなり、若い人が入らなくなった。その作家協会とは別に 1997 年にウクライナ作家連合会ができ、1998 年にペンクラブ⁴⁸ができて活躍している。

5. ウクライナ文学：そのジャンルと活躍する世代

独立してからは、ウクライナ文学はそれまで唯一のジャンルだった社会主義リアリズムから脱して、魔術的リアリズム、モダニズムやポストモダニズムへの発展があった。一日も早くコロニアルな状況から脱出したいと望むウクライナの文学者が色々な挑戦をした。それまでの文学界では伝統の連続性が非常に重要視されていたが、独立すると共にどの伝統を守るかが課題になった。グローバル化が進む中でだれでも自由に外国に行けるようになって、外国文学の作品を原文でも翻訳でも読むようになり、そこから受けた印象をウクライナ語で表現しようと試みたりした。それまでなかったホラー小説、SF 小説、日記、また旅行記なども現れるようになった。そして独立後は特に短編のジャンルも注目されるようになった。多くの作家が短編という短くて映画のようなものを試みた。ウクライナ文学はまだまだ日本語に翻訳されていないが、現代ウクライナ文学の短編集が出ていて、そこに独立後に作家として成長した 17 人が紹介されている⁴⁹。

現在のウクライナ文学には活躍しているいくつかの世代があって、それぞれ特徴があるので少し述べていきたい。

まずはソ連時代の 60 年代によく活躍した 1928 年から 47 年の間に生まれた人たちだ。ソ連時代に「心の亡命」の世代とも言われた詩人のリーナ・コステンコ(Ліна Костенко)、またドミトロ・パフリチコ(Дмитро Павличко)。作家のワレーリー・シェフチュック(Валерій Шевчук)もその 1 人だ。

⁴⁷ <https://www.comma.kiev.ua>

⁴⁸ <http://pen.org.ua>

⁴⁹ 藤井悦子、オリガ・ホメンコ編訳『現代ウクライナ文学短編集』群像社、2005 年。

その次にくるのは「70年代の人」で1939年から53年の間に生まれた「ポスト60年代の人たちで内向き」とも呼ばれる作家のレシ・ポデレビヤンスキ(Лесь Подеревянський)、カテリーナ・モトリッチ(Катерина Мотрич)、ユーリ・ウィンイチュック(Юрій Винничук)、またこの前になくなったオレグ・リシェガ(Олег Лишега)、ボフダン・ジョルダック(Богдан Лишега)。それからエッセイストで文学評論家のミコーラ・リャブチュック(Микола Рябчук)もその1人だ。

そのあとに1949年から65年の間に生まれた80年代人。個人主義で「メランコリーの世代」とも呼ばれる作家のオクサーナ・ザブジュコ(Оксана Забужко)、レオニッド・コノビチ(Леонід Кононович)、詩人のユーリ・アンドルホビチ(Юрій Андрухович)、イワン・マルコビチ(Іван Малкович)、ビクトル・ネボラック(Віктор Неборак)、ナタルカ・ピロツェルキウヰツィ(Наталка Білоцерківець)、ハリーナ・パフチャック(Галина Пагутяк)、コスチャンティン・モスカレツィ(Костянтин Москалець)。ヴォロディミル・ディブロワ(Володимир Діброва)、イレン・ロズドブディコ(Ірен Роздобудько)など。またもう亡くなったイホーリ・リマルック(Ігор Римарук)、フリツコ・チュバイ(Грицько Чубай)、オレーシ・ウリャネンコ(Олесь Ульяненко)だ。

また1964年から77年の間に生まれた90年代人は「落ち込みの激しい世代で文学を多様化した世代」とも呼ばれてもいいかもしれない。国の検閲がなくなって自由になり、また上の世代の詩人のリーナ・コステンコに「自分で自分に厳しくセンゾーシップをするべきだ」という定義から脱出しようと考えた。そしてこの時代に初めて今まで文語ではなかった言葉を使うようになった。話題や作品でも色んなチャレンジをした。詩人のマリアンナ・サフカ(Мар'яна Савка)、セルヒー・ジャダン(Сергій Жадан)、イワン・アンドルシャック(Іван Андрусак)、ワシーリ・マフノ(Василь Махно)、ロマン・クハルック(Роман Кухарук)、そして作家でエッセイストのアンドリー・ボドナル(Андрій Боднар)、タラス・プロハシコ(Тарас Прохасько)、ステパン・プロツィウック(Степан Процюк)、ラリサ・デニセンコ(Лариса Денисенко)はその代表者である。

そして1978年から88年の間に生まれた2000年世代は文学コンクールに参加して優勝するし、自己PRやパフォーマンスが上手な世代である。その代表者として詩人のカテリーナ・バブキナ(Катерина Бабкіна)、セルヒー・ジャダン(Сергій Жадан)、ドミトロ・ラズトキン(Дмитро Лазуткін)、ハリナ・クルック(Галина Крук)、スウィトラナ・ポワリャエワ(Світлана Поваляєва)がいて、作家のユーリ・アンドルホビチ(Юрій Андрухович)、ミハイロ・ブリニフ(Михайло Бриних)、リュブコ・デレシ(Любко Дереш)、アナトリー・ドニストリウイー(Анатолій Дністровий)、イレナ・カルパ(Ірена Карпа)、スウィトラナ・ピルカロ(Світлана Пиркало)、タラス・プロハシコ(Тарас Прохасько)、サシコ・ウシカロフ

(Сашко Ушкалов)、ナタルカ・スニャダンコ(Нагалка Сняданко)がいる。時代によって違う作品を書くため、同じ人が違う「世代」に入っていることもある。

さらに 2010 年以降に現れた、まだ特徴が描けない世代もある。その代表者としてタラス・マルコビチ(Тарас Малкович)、レシ・ベレイ(Лесь Белей)、作家のビクトリア・アメリナ(Вікторія Амеліна)、ミコラ・ラユック(Микола Лаюк)がいる。

それ以外に時代別にグループ分けできないウクライナ作家もいる。その人たちはどちらかという個性が強く、自分の世代を代表するグループと少し距離をおいて立っている。それがハリーナ・パグチャック(Галина Пагутяк)、オレグ・リシェガ(Олег Лишега)であり、ユルコ・ポカルチュック(Юрко Покальчук)もそうだった。

もうひとつ独立後の特徴はウクライナ語とロシア語の間に言語を混ぜ合わせて生まれた「スルジック」という言葉で書かれた作品である。文学評論家のタマラ・フンドロワによると、それが時代と文化の間の衝突で生まれたもので、トランジット文化の特徴でもある。それは文学だけではなく、文化全般でも現れ、ポップ歌手のウェルカ・セルデュチカ(Андри・ダニルコ)の登場と大人気がそれを表している。スルジックで、しかも文学史の本を書いたのは、トランジット文化を代表する作家のミハイロー・ブリニフ(Михайло Бриних)⁵⁰である。彼は世界文学の偉大な作品についてスルジックでパドリュッチョ博士という名前の人物に語らせた本を出して人気がある。また同じスルジックで書く脚本家として、レシ・ポデレビャンスキ(Лесь Подерев'янський)も有名だ。彼は自分の作品でウクライナ語、スルジックにロシア語の隠語を面白おかしく使い、とても受けている。

ウクライナ文学のジャンルの話に戻ると、独立後は短編が流行ったが、少しずつ小説や長編小説にチャレンジするようになった。また 2000 年に入ってから歴史や社会の話題をテーマにした小説が現れてとても売れるようになった。特にワシーリ・シキリャル(Василь Шкляр)⁵¹、マリヤ・マティオス(Марія Матіос)、ヴォロディミル・リス(Володимир Лис)、ミロ斯拉フ・ドチネツィ(Мирослав Дочинець)⁵²、イレン・ロズドブジコ(Ірен Роздобудько)、ソフィア・アンドルホビチ(Софія Андрухович)、セルヒー・ジャダン(Сергій Жадан)などが小説でベストセラーを出している。

もっとも、例えばドイツ文学のトーマス・マン、ロシア文学のドストエフスキーのような本当に長い長編はまだなかった。それを批判する者がウクライナ語ではそういう長編は書かれないと言い続けているうちに、2009 年、オクサーナ・ザブジュコ(Оксана

⁵⁰ М. Бриних. Шидеври світової літератури: хрестоматія доктора Падлючча. Лаурус, Київ, 2013; Михайло Бриних. Шахмати для дебілів: цейтнот доктора Падлючча. Факт, Київ, 2008

⁵¹ В. Шкляр. Чорний ворон, Ярославів Вал, Київ, 2009.

⁵² М. Дочинець. Вічник. Сповідь на перевалі духу, Карпатська вежа, Ужгород, 2011

Забужкоが『置いて行かれた秘密の博物館』⁵³という 832 頁の小説を出した。この本は 2013 年に中央ヨーロッパの「アンゲラス」賞も受けた。哲学学部卒で文学評論家で最も有名な女性作家であるオクサーナ・ザブジュコは、独立後初のウクライナのフェミニストでありながら、中身の濃い歴史小説も書く人で様々な賞を獲得し多くの外国語にも訳されている。2019 年のシェフチェンコ賞も受賞した。政治的なエッセイ以外で最も有名な作品は 1996 年に出している「ウクライナのセックスのフィールドワーク」。数年前から「コモラ/Комора (倉庫)」という出版社も設立し外国文学の出版にも力を入れている。最近の十年間で作家が出版社を起業することは珍しくない。詩人のイワン・マルコビチはアババガラマга А-ба-ба-га-ла-ма-га、そして作家のワシール・ガーボルはピラミダ (Піраміда)、カプラーノフ兄弟がエレニー・ペス (Зелений пес) という出版社をやっている。

6. 主な作家と作品

以下では、現在のウクライナの主な作家と作品を紹介しよう。

1960 年代から活躍し、80 年代に最も有名な詩人となったリーナ・コステンコ(Ліна Костенко)は、2010 年末に初めての小説となる『ウクライナのいかれた人の日記』を出すと大変注目を浴びてかなり売れた。これは、主人公の 30 代のプログラマーがオレンジ革命を体験し、自分のアイデンティティ、家族関係、またウクライナの 1990 年代、2000 年代の社会的政治的な変化を考えながら語るとても面白い物語になっている。この本では主人公がウクライナ人の我慢強い特徴を考えながら、「我々の我慢は気持ち悪いものだ。全て自分自身を拒否する私たちの習慣。ある日、その“全て”を我々が拒否する日が来るかもしれない」と語り、また変化について考えながら「何かが変わるのではなく、全ては昔のまま変わらずに残るような恐怖を感じる」と言う。この文章だけでもタマラ・フンドロワが言うウクライナ文化のトランジット性が確認できる。

また「ウクライナのベストセラーの父」とも呼ばれる 1951 年生まれのワシーリー・シクリアル(Василь Шкляр)は、今までに 14 の小説を出版し、2011 年にシェフチェンコ賞も受賞した。一番有名な『黒いカラス』⁵⁴は 1920 年代にソ連と対抗していたウクライナ独立軍の話で、KGB が公開した資料を元に書かれた。この作品にもいやになるほどのウクライナ人の我慢強さが特徴として語られる。「... (軍隊に) 新しく入ってきた人間がよく聞かれるのは「どうしてここに入ったのか？」だが、ある人はロシア人に家を持たされたから、また違う人は泥棒に入られたからと答える。また別の人は好きな女性がレイ

⁵³ О. Забужко. Музей покинутих секретів, Факт, Київ, 2009.

⁵⁴ В. Шкляр. Чорний ворон.

プされたからと言う……ここでは昔からそうだった。外部の人に嫌なことをやられる前に我々は黙り続ける……」。

同じ世代で 1952 年生まれのもう 1 人の有名な作家はユーリー・ウィニチュク(Юрій Винничук)である。彼も 12 冊の小説が出版されている以外、短編、子供向けの本、そして地域の歴史書や百科事典の仕事にも関わっている。彼の作品は男女関係に触れているものが多く、また好きな作家ではウンベルト・エーコやボルヘスをあげている。2012 年に出した『死のタンゴ』⁵⁵で同時にふたつの物語を語っている。第二次世界大戦下のウクライナ人、ロシア人、ポーランド人、ユダヤ人の 4 人の友達の話と、現在のウクライナとトルコでの話が結末になる物語で、2012 年のBBCの「今年の本」賞を受賞した。

1950 年生まれの人気作家ヴォロディーミル・リース(Володимир Лис) の最も有名な小説は、『ヤーコブの 100 年間』⁵⁶ (2010 年) と『ソロミヤの為のソロ』⁵⁷ (2013 年) だ。前者は自分の人生で 5 つの政権を経験してきたヤーコブの物語である。この小説では「人間の気持ちは命より大事だ。それがなければ……十分に生きていても言えない。植物のような生き方だ」と述べる。また「完全な休みは病人のもの。だが活動は元気な人のお友達である」とも言う。また『ソロミヤの為のソロ』では「幸せは自家製のお酒と違って人に火傷をさせることがない」と主人公が言う。この作品ではソロミヤという女性の恋と人生を第 2 次世界大戦下のウクライナという歴史を背景に描いている。ちなみに、ワシーリー・シクリャルとヴォロディーミル・リースの作品は学校のウクライナ文学の授業に取り入れられている。

1959 年生まれのミロスラフ・ドチネツィ(Мирослав Дочинець)も注目すべきだ。彼の『時代をみた人』(Вічник)⁵⁸はカルパチア地方に住んでいる 100 歳近いおじいさんの伝記のような物語で昔ながらのウクライナ人の思想や知恵が伝えられる。作家の父親がキエフ大学卒で政治的な理由で 6 年間もグラグのラーゲリに送られていた。おそらくこの本では、今まで老人たちから聞いたものを色々伝えたかったに違いない。このような本は今までウクライナ文学になかったので、とても好評だった。この本には生き方に対する考えだけではなく長生きするために食べ物、飲み物、運動に対してのアドバイスやレシピまで書かれている。それは仏教に近いとも言える。ミロスラフ・ドチネツィも出版社を経営していて、2014 年にシェフチェンコ賞を受賞した。

すでに紹介したオクサーナ・ザブジュコ (Оксана Забужко) の 1996 年出版の『ウクラ

⁵⁵ Ю. Винничук. Танго смерті, Фоліо, Харків, 2012.

⁵⁶ В. Лис. Століття Якова, Клуб сімейного дозвілля, Харків, 2010.

⁵⁷ В. Лис. Соло для Соломії, Клуб сімейного дозвілля, Харків, 2013.

⁵⁸ М. Дочинець. Вічник. Сповідь на перевалі духу, Ужгород: Карпатська вежа, 2011.

イナのセックスのフィールドワーク』⁵⁹という作品はアメリカに研究に行った女性がウクライナ人のアーティストに恋しながら女性として、研究者として、またウクライナ出身者としてのアイデンティティを見直す物語である。セックスとアイデンティティというテーマはそれまでもオープンに語られたことがなく、発表当時は爆発的に売れたストーリーだった。この小説ではウクライナの歴史と人間の忍耐の関係を考えながら、自分たちのことを「我々は綺麗な民族だった。前向きで、強くて背が高く、自分の土地に深く強いルーツを持っていたが、長い間その根っこを引っ張られてその土地から出され、地球を震わせた。それで我々は遠く飛んで行ってしまった。結納で持って行くはずだった羽枕がライフルバヨネットで作られてから出てしまった羽のように我々は飛んでしまった。我々は結婚式の準備に夢中だった。ルシニックを刺繍しながら歌を歌っていた。クロスステッチのようにその歌の言葉を重ね続けていた……今までの歴史はずっとそうだった……それで行動しないまま全部失ってしまった」と認める。また『置いておかれた博物館』⁶⁰では1940年代から2004年までのある家族の3世代のことを語りながら、国、また強い女性のことを考える。「あなたは強い、とても強い女である。見た目よりも、自分で思っているよりも強い女である。本当の強い人に限って人生のシナリオが破壊した時に差し出された手を掴まない。あなたのように反応する。無意識に1人になって、しばらくそのままである。怪我したオオカミのように。オオカミの群れを離れて森に逃げるかのように。そこで直してくれる薬草を見つけるか死ぬか」。

1960年生まれのエーリク・アンドルホビチ(Юрій Андрухович)は有名な「ブ・バ・ブ」(Бу-Ба-Бу)という詩人のグループ出身で、ハンナ・アレント賞をはじめ国際的な賞をたくさん受賞している詩人、エッセイストでありながら、6冊の小説も出している。2011年に111の違う町について『親密の町の語彙』⁶¹というエッセイ集を出し、2017年に色んな歴史的な事件を扱った『司法の恋人達』⁶²という物語を出版した。後半の本は2018年のBBCの「今年の本」賞を受賞した。前者は日記文学に挑戦した小説で地理学とのロマンとも呼ばれている。また他の国の民族を考えながらウクライナ人の位置(地位)を考えている。

1969年生まれのアンドレイ・クルコフ(Андрей Курков)もこの世代の代表者でもある。日本語にも訳されていて人気がある⁶³。最近の小説『シェンゲンのストーリー』⁶⁴、また

⁵⁹ О. Забужко. Польові дослідження з українського сексу, Згода, Київ, 1996.

⁶⁰ О. Забужко. Музей покинутих секретів.

⁶¹ Ю. Андрухович. Лексикон інтимних міст, Мерідіан Черновіц, Чернівці, 2011.

⁶² Ю. Андрухович. Коханці юстиції, Мерідіан Черновіц, Чернівці, 2018.

⁶³ アンドレイ・クルコフ『ペンギンの憂鬱』新潮クレスト・ブックス、2004年；同『大統領の最後の恋』新潮クレスト・ブックス、2006年。

⁶⁴ А. Курков. Шенгенская история, Фолио, Харьков, 2016.

2015 年に出した『マイダンの日記』はもう日本語に訳されている⁶⁵。クルコフは最も早くから外国で売れた作家で、今でも世界的にとっても売れている。彼もウクライナやウクライナ人のアイデンティティのことをよく考えている。

この世代のもう 1 人の代表者が 1959 年生まれのマリヤ・マティオス(Марія Матіос)という作家だ。彼女の最も有名な作品で BBC の賞を受けたもので、ソ連軍が占領した西ウクライナの村の生活を描いている 2004 年の『可愛いダルーシャ』⁶⁶がある。マティオスはウクライナの複雑な歴史を考えながら、人間関係を話題にする。

2007 年にジョセフ・コンラッド賞も受賞した 1968 年生まれのアラス・プロハシコもこの世代の代表者の 1 人である。今までに 7 つの作品を出しているが彼の短編は綺麗な読みやすいウクライナ語で書かれ、とても考えさせられる哲学的なものである。なかでも『なぜならその通りである』⁶⁷という作品は興味深く、人の自由、社会、また人との関係をよく考えさせるものである。たとえばソ連のシステム破壊についてはこう語る。「我々は他のものではなく、システムと戦っていたことをもう忘れた。システムは新たなシステムに生まれ変わる。つまり、システムはシステムしか生み出せない。そしてその新たなシステムは昔のものと一緒で、我々を全面的に破壊させることが目的なのだ」。

7. 進む国際化：外国在住のウクライナの作家

特に 2000 年以降、グローバル化と国際化が進む中で、多くのウクライナ人が外国で勉強したり仕事したりしている。その中で何人かの作家は外国在住でありながらウクライナ語で作家活動をしている。例えば、ロンドン在住のスウィトラナ・プルカロ(Світлана Пиркало)、ニューヨーク在住のワシーリー・マフノ(Василь Махно)、ウィリニウス在住のヤロスラフ・メルニック(Ярослав Мельник)、ウィーン在住のターニャ・マリヤルチュック(Таня Малярчук)とパリ在住のイレナ・カルパ(Ірена Карпа)がいる。

西ウクライナ出身のワシーリー・マフノの短編もウクライナの歴史と現代のアメリカで生活しているウクライナ移民の生活を描いていて、2016 年にBBCの文学賞を受賞している⁶⁸。マフノは最初詩人として活躍し、のちに作家になった。彼の詩は孤独、恋、男女関係、多様化を考えるものが多い。例えば、リヴィウにあるビズメンスカ通りで恋している若い女性との別れについての詩は少し谷川俊太郎に似ているようにも思える。

⁶⁵ アンドレイ・クルコフ『ウクライナ日記 — 国民的作家が綴った祖国激動の 155 日』ホーム社、2015 年。

⁶⁶ М. Матіос. Солодка Даруся, Піраміда, Львів, 2004.

⁶⁷ Т. Прохасько. БоТакЄ, Лілея, Івано-Франківськ, 2010.

⁶⁸ В. Махно. Дім у Бейтінг Голлов, ВСЛ, Київ, 2015.

同じ世代でリトアニアのヴィリニュスとフランスのパリに在住している 1959 年生まれのヤロスラフ・メルニク(Ярослав Мельник)の短編は、神話的なイメージを取り入れながら心理学的なモチーフが多い。2012 年にやはりBBC賞を受賞している⁶⁹。作品にはウクライナの伝統的なマジック・リアリズムの考え方と呼ばれる部分が見られる。特に『私に電話し、話してくれ』という短編集の中におさめられた若返って子供に戻るおばあさんの話は、フィッツジェラルドの“The curious case of Benjamin Button”⁷⁰に少し似ている。

また、世代は違うが、ウィーンに住んでいる 1983 年生まれのターニャ・マリヤルチュック(Таня Малярчук)も不思議な作品を書いている。彼女は今まで 7 つの小説と 1 冊の子供の本を出している。皆と違う主人公が彼女のストーリーの中心になっていることが多い。人を動物に例える魔術的リアリズム⁷¹の短編は、皆と違って優しすぎてよく人助けをしているのになかなか厳しい現実には馴染めない女の話で、またウクライナの現実を非常によく表しているリアルな作品もある⁷²。他に、ウクライナの忘れられた思想家のビャチェスラフ・リピンスキ(Вячеслав Липинський)についても小説もあって⁷³、ジャンルもスタイルも幅広く活躍している作家である。ドイツ語でも作品を出していてジュンパ・ラヒリー、多和田葉子のような大きな舞台で活躍できるコスモポリタンの存在だ。彼女は 2018 年の夏にドイツ語世界でもっとも有名なインゲボルグ・バッハマン賞も受けて国際的にも作家として認められている。

8. 女性文学・女性小説

40 代～50 代の女性作家をひとつのグループに分けることができる。20 冊以上の人気サスペンスの著者で作品がよく映画化されるイレン・ロズドブジコ(Ірен Роздобудько)。作家で弁護士でもあるラリサ・デニセンコ(Лариса Денисенко)、それからリューコ・ダシュワール(Люко Дашвар)というペンネームで書くイリーナ・チェルノワ(Ірина Чернова)がいる。

イリーナ・チェルノワ(リューコ・ダシュワール)は 1957 年生まれで今まで 10 冊近い作品を出している作家で脚本家でもある。そしてウクライナの作家には珍しく 10 万部を売る人でもある。彼女の作品には 20 世紀から 21 世紀にかけてのウクライナの村や農村の生活をテーマにした作品が多い⁷⁴。イメージもストーリーも良く、売れ行きも良く、

⁶⁹ Я. Мельник. Телефонуй мені, говори зі мною, Темпора, Київ, 2012.

⁷⁰ F.Scott Fitzgerald. *The Curious Case of Benjamin Button and Other Jazz Age Stories*, Penguin Classics, New York, 2008.

⁷¹ Т. Малярчук. Звіролов, Фоліо, Харків, 2009.

⁷² Т. Малярчук. Біографія випадкового чуда, КСД, Харків, 2012.

⁷³ Т. Малярчук. Забуття, Видавництво Старого Лева, Львів, 2016.

⁷⁴ Люко Дашвар. Село не люди, КСД, Харків, 2007; Рай. Центр, КСД, Харків, 2009; Молоко з кров'ю,

国内文学賞も受けている。作品では男女関係、恋、嫉妬、復讐などをテーマにして人生哲学を語る。

1962 年生まれのイレン・ロズдобудько(Ірен Роздобудько)は 20 冊以上の作品を出している脚本家としても有名で、演劇大学でもシナリオの講義をしている。彼女の作品は映画的であって映画化されたものもある⁷⁵。また謎解きの要素もあり、最後まで読むとその謎を解読することができる。この作家も男女関係、女性の社会的な地位と役割、また女性の自由を話題にすることが多い。ロズдобудькоはドネツク出身で初期の作品はロシア語だったが、後になってウクライナ語で小説を書くようになった。しかもとても綺麗なウクライナ語で、読んでいるとその語り方に感動する。

1973 年生まれのアリサ・デニセンコ(Лариса Денисенко)が 2006 年に出した『マスクでの踊り』⁷⁶の舞台は韓国で、ウクライナ人女性が今まで良く知らない「東洋」での人間関係を眺めている話で、刊行したその年に国内の雑誌賞を受けた。デニセンコは今まで 11 冊の小説と 7 つの子供の本を出している。最近の多様化している現代家族について子供向けに書いた『ママと彼女のお母さん達』⁷⁷という物語は 2017 年に大きな話題になった。その本を読みながら、父親のいない家庭、母親が 2 人いる家庭など様々な家族のかたちについて子供が知ることができる。しかしそれが「伝統的な家族を破壊する意識を普及させる」と保守的なウクライナの団体には非常に評判が悪くて、本のプレゼンテーションも中止になったことがある。それでもこの本は良く売れた。デニセンコは弁護士として十分なキャリアをもち、また社会番組を中心にラジオでプレゼンターとしても活躍している。

このグループにはハリーナ・フドビチェンコ(Галина Вдовиченко)⁷⁸とミラ・イワンツォワ(Міла Іванцова)⁷⁹という女性作家も入れることができる。フドビチェンコも今まで 18 冊のとても読みやすい物語を出している。また面白くて笑える子供向けの本も出している。その中の『黒くてより黒い鶏』⁸⁰は特筆すべきものである。

ここであげた作家たちはジェンダーでまとめたというよりは、世代的に 40 代から 50 代で共通していて、女性や家族など共通のテーマを追いかけて、女性の声がよく聞こえる作品を書いていて良く売れている人たちだからである。

Клуб сімейного дозвілля, Харків, 2008.

⁷⁵ І. Роздобудько. Гудзик, Фоліо, Харків, 2005.

⁷⁶ Л. Денисенко. Танці в масках, Нора-Друк, Київ, 2006.

⁷⁷ Л. Денисенко. Мая та її мами, Видавництво, Київ, 2017.

⁷⁸ Г. Вдовиченко. Пів'яблука, Нора-Друк, 2008.

⁷⁹ М. Іванцова. Родовий відмінок, Нора-Друк, 2009.

⁸⁰ Г. Вдовиченко. Чорна-чорна курка, Видавництво Старого Лева, Львів, 2018.

9. パフォーマンスの上手な世代

このグループには 30 代と 40 代が入っている。年齢が少し離れているが、お互いに共通点がある。彼らは面白い作品を書き自分の PR 活動も上手で、また前の世代と違って自分ができることをお金に変えることも上手であると言える。多くの作家が社会活動をしているが、この世代はソーシャル・メディアの利用が上手で、ウィルス・マーケティングのようなものを使って自分の活動についての情報を普及させるのは早い。また人の注目を集めるだけではなく、イベントに人を集めるのも早い。その中でパフォーマンスする人も多いのだ。

このグループには 10 万部を売ったことのあるセルヒーイ・ジャダン(Сергій Жадан)、若い時から作家活動に加わって成功したリュブコ・デレシュ、パリ在住の作家で歌手のイレーナ・カルパ(Ірена Карпа)、詩人で児童文学作家のカテリーナ・バブキナ(Катерина Бабкіна)、詩人で作家としてもデビューしたアンドリー・リュブカ(Андрій Любка)、映画監督もやっているイリーナ・ツィリック(Ірина Цілик)、それからブロガーから作家になったボフダン・ログウィネンコ(Богдан Логвиненко)がいる。

1974 年生まれのセルヒーイ・ジャダン(Сергій Жадан)は 40 代で、この世代では最も有名な詩人で作家なので、彼の詩の朗読会はいつも満席になる⁸¹。10 冊ほどの詩集と 5 冊の小説を出しているが、詩は非常に繊細で、小説は社会問題によく触れる。彼もパフォーマンスが上手で、「ジャダンと犬」(Жадан і собаки)というロックバンドでも歌っている⁸²。

ジャダンはある意味で 1970 年代から 80 年代にかけて生まれて、ソ連崩壊から独立の時代に 20 代で、90 年代の大変さを経験し絶望している「失われた世代」の意見を語っている作家である。自分の世代の代表する声で、ある意味でウクライナの村上春樹のような存在だ。彼は「母国」、「地域との繋がり」、「若者の考え方」、個人と集団、また政治的な状況についてよく考える作家である。ヤヌコヴィチ政権の時に「この政権は武器への愛着を強化させる。この政府は母国愛を失わせる」と書いた。また「あなたが寝言を言っても理解してくれるところが母国である」と彼は言う。ジャダンは東部出身なので、2014 年東部で戦争が始まって以降、戦争で被害を受けている子供達向けに援助する NGO もやっている⁸³。

30 代を代表する作家の筆頭はかつて「若者天才」とも言われていた 1984 年生まれのリュブコ・デーレシュ(Любка Дереш)だ。彼の最初の作品は 18 歳の時に出版され、今まで

⁸¹ С. Жадан. Ворошиловград, Фолію, Харків, 2010; С. Жадан. Інтернат, Meridian Czernowitz, Чернівці, 2017.

⁸² https://www.youtube.com/watch?v=kMq_uX37lm0

⁸³ <http://zhadancharity.org.ua>

11 冊の本を出している。最も有名な作品はファンタジー系で主人公が少年なので、同世代の人にかなり人気がある⁸⁴。あまりにも若いうちに作家になって売れたせいか、彼の世代がよく悩む世代間の衝突をテーマにした作品も多い。「我々は逃げる。一生。ひとかたまりの知恵と親戚のアドバイスから。そしてレンガを運んで高い壁を作る」と語り、作品には世代の孤独感もよく出ている。

小説家で歌手で 1980 年生まれのイレーナ・カルパ(Ірена Карпа)はフランス語学科卒でパリに住んでいる。10 冊近く書いている小説の主人公は家族の伝統や社会規範と戦っている人が多く、人気がある⁸⁵。シンガーソングライターの歌手としても活躍し、今まで9 枚ほどCDを出して、自分でQARPAというロックバンドも結成している。今まで色々な時代を生きてきたカルパはそれを自分の作品で表現し、20 代向けの小説から子供を持った若い母親向けの紀行文のような本も出している。

彼女の作品は若者の日常会話のウクライナ語で書かれている。パフォーマンスに上手なカルパは 2014 年の政変の時も色々活躍し、政権が変わった後に在フランスウクライナ大使館の一等書記官、文化担当になった。彼女の作品によれば「満足して生きるためには隣で嫉妬する人から嫌われるくらいの豊かなステータスのようなものは必要ない。自分が持っているもの、やっていること、感じていることで満足すべきなのだ。不思議なことに豊かになると同時に満足感が増すわけではない。借りた家でも自分が好きな色に壁を塗り替えることができる。家具なしでも高いワインを飲めるような生活も送ることができる。車を持たないでも自転車でも他の人が夢にも見られないところに行くことができる」。カルパはコスモポリタンでもあって自由主義を主張している。彼女によると「一番大事なのは自分の意思で全てをやること。それなら全部道徳的で正しいのである。自分に無理を強いるのは大きな罪である。」

パフォーマンス世代のもう 1 人の代表者で、詩人で小説家で翻訳者としても活躍しているのが 1987 年生まれのアンドリイ・リュブカ(Андрій Любка)⁸⁶である。彼は「デーニ」(День)という新聞でのコラムニストとしても活躍し、国内でも外国でも多くの読者会を開いている。彼は、カルパチア地方の街でタバコの非合法輸出のためにと国境に近いところで掘られたトンネルに、ふとしたことで中学校の地理の先生が落ちたことから始まって良く笑えるサスペンス小説の『カルビッド』⁸⁷、交通事故で死んだ女性をめぐる『あなたの目線、チオチオさん』⁸⁸という小説も出している。人間関係、男女関係、個

⁸⁴ Л. Дереш. Культ, Кальварія, Київ, 2001.

⁸⁵ І. Карпа. З Роси, з Води і з Калабані, Клуб Сімейного Дозвілля, Харків, 2012.

⁸⁶ А. Любка. Кімната для печалі, Мерідіан Черновіц, Чернівці, 2016.

⁸⁷ А. Любка. Карбід, Мерідіан Черновіц, Чернівці, 2015.

⁸⁸ А. Любка. Твій погляд, Чіо- Чіо сан, Мерідіан Черновіц, Чернівці, 2018.

人と社会の関係をテーマにした作品が多い。リュブカによると、「一番好きな人々に自分の愛を語るのはもっとも難しいのだ。長い間強く愛しているのでそれが当たり前になる。愛しているのは明確であるので、それを伝えるのはおかしいと感じる。だから恥ずかしくて、打ち明けるのは、また自分が無防備であることを感じるのは怖くて黙っている。なぜなら「愛している」という言葉で人は無防備になるから。」。リュブカによると「全ての本当の愛は偶然である。あるときから心臓がジャズのリズムで動き始めるからだ。」。

同じ世代で非常に自己PRや自分の作家としての才能をお金に変えるのがうまい 1985 年生まれの女性詩人で、小説家、また児童文学作家でもあるのがカテリーナ・バブキナ (Катерина Бабкіна)⁸⁹である。作家になるための若者向けの有料ワークショップを指導したり、オーストリアやアメリカでの国際的な作家合宿や読者会にも参加したり、ソーシャルメディアにも力を入れている。

同じ世代の映画監督で作家、詩人でもあるイリーナ・ツィリック (Ірина Цілик)⁹⁰も有名である。彼女の小説には女性中心の 3 世代の物語もある。また 2017 年に、ウクライナ軍で活躍しているボランティアの女性についての『見えない部門』という映画を作っている。彼女は作品のなかで登場人物に、「あなたには世界がある。その世界は柔軟性がある。その世界を掴め。見るのではなく、見分けることを学べ。聞くことを学べ。」と語らせている。

まだ 20 代で旅行ブログを始めて、旅行記も出版されたボグダン・ログウィネンコ (Богдан Логвиненко)⁹¹もここ数年で注目を浴びている。彼の最初の小説の女主人公のポルノスターは語り手で、自分の生活について述べている。ログビネンコは現在国外旅行を中止し、国内旅行に集中したプロジェクトをやっている。ウクライナの全ての地方の文化とその文化を支えてくれている人物についてビデオ映像で紹介するUkrainier⁹²というクラウドファンドのプロジェクトをやっている。彼のポルノ映画に出演している女性の主人公の日記小説は非常に話題になった。ポルノと言いつつ、その話は一切ないのだ。ウクライナ人には恥ずかしがり屋のところもあって、これまで性的な話がでてくる作品は

⁸⁹ К. Бабкіна. Щасливі голі люди, Мерідіан Черновіц, Чернівці, 2016.

⁹⁰ І. Цілик. Родинки, Електроніка, Київ, 2012.

⁹¹ Б. Логвиненко. Saint Porno. Історія про кіно і тіло, Клуб Сімейного Дозвілля, Харків, 2016.

⁹² https://www.youtube.com/watch?v=eLEl_AcO1OA&feature=youtu.be&fbclid=IwAR0DSO275ze0MhsaZOcqBNZr5TDCeSjuSLhkvUT-dWixp0zFVG_D_pxC-PU;
[https://www.facebook.com/ukrainer.net/?__tn__=K-R&eid=ARcjIV3yVpLgfvBo8bm6mPxU8bIKwwErwyf1VsIY3mr-s9q8tiytUeMWUzpld1TCbTeg9W3lnmSqeHV1&fref=mentions&__xts__\[0\]=68.ARBu54dpQqMlujZlnANxGXjjXGbywd8i0pumSYJnf1iTwKTc94DcC15qUSXObkLbd9SOQoXgGiPqev9TDXSFulhYAinmy0QoZIP9kRLQ27hTFbS_vN1oa6ZgJFvvDMnb_jCkO06Zn2k77RkhLEw2pVxE5RwbyOMCnghLAR80vOeUqTl824_EKyKS4gbd-IxPcNmDZubOQH5DN6fiwg](https://www.facebook.com/ukrainer.net/?__tn__=K-R&eid=ARcjIV3yVpLgfvBo8bm6mPxU8bIKwwErwyf1VsIY3mr-s9q8tiytUeMWUzpld1TCbTeg9W3lnmSqeHV1&fref=mentions&__xts__[0]=68.ARBu54dpQqMlujZlnANxGXjjXGbywd8i0pumSYJnf1iTwKTc94DcC15qUSXObkLbd9SOQoXgGiPqev9TDXSFulhYAinmy0QoZIP9kRLQ27hTFbS_vN1oa6ZgJFvvDMnb_jCkO06Zn2k77RkhLEw2pVxE5RwbyOMCnghLAR80vOeUqTl824_EKyKS4gbd-IxPcNmDZubOQH5DN6fiwg)

オクサーナ・ザブジュコの『ウクライナのセックス・フィールドワーク』くらいしかない。ザブジュコと同じように、ログウィネンコの作品でもメインの主人公は肉体ではなく、ウクライナにおける女性に対する社会規範、女性がやるべきこと、やっただけいけないことについて考える本なのだ。

そしてこの世代でもう 1 人の有名な作家はソフィア・アンドルホビチ(Софія Андрухович)である。世代的には一緒だが、PR活動はしないで作家活動に専念している。ユーリ・アンドルホビチの娘で今まで 5 冊くらいの小説を出していて、その中で『フェリクス・オーストリア』⁹³はBBCの賞も受賞し、ポーランドの文学賞も受けた。1900 年の西ウクライナの元スタニスラフ市、今のイワノ・フランクフスクという町に住んでいるセテファという女性の日記であって歴史小説でもある。ソフィア・アンドルホビチは英語とポーランド語からの文学翻訳もしている。

10. 2014 年政変以降の戦争を話題にした文学

ウクライナでは本を読む人が減っているとも言われているが、2013 年から 14 年にかけてキエフの「マイダン革命」で政権が倒された時に、その広場（マイダン）でボランティアによって臨時図書館も開かれていたという事実がある⁹⁴。非常事態でも人は本との付き合いを忘れていなかった。

また 2014 年以後の 4 年間、14 年 2 月にキエフの広場で 100 人近くの人が殺されて東部では戦争が続いているのはウクライナの人々にとってトラウマ的な経験である。その経験が最近いくつかの文学作品になって現れた。まずは、実際に戦争に行ってきた経験をもとに書かれた 1976 年生まれのジャーナリスト、ルスラン・ホロウィイ(Руслан Горовий)の『寝る前の昔話』⁹⁵というエッセイ集と、1985 年生まれのアルテム・チェフ(Артем Чех)の日記に近い『ゼロポイント』⁹⁶という本である。またアンドレイ・クルコフ(Андрей Курков)の『ウクライナ日記 — 国民的作家が綴った祖国激動の 155 日』⁹⁷もそのひとつといえる。この本はそれまでと全く違うものであって、戦争や政変の経験をテーマにしたものである。

子供向けの本でも直接戦争をテーマにしたものが増えたことを感じる。特に翻訳された子供の本にもそれが影響した。この数年に出た『ロンドを変えた戦争』⁹⁸、また親戚

⁹³ С. Андрухович. Фелікс Австрія, Видавництво Старого Лева, Львів, 2014.

⁹⁴ <https://life.pravda.com.ua/culture/2014/01/31/150643/>

⁹⁵ Р. Горовий. Казки на ніч, Кальварія, Львів, 2015.

⁹⁶ А. Чех Точка нуль, Віват, Київ, 2017.

⁹⁷ Андрей・クルコフ『ウクライナ日記』.

⁹⁸ Війна, що змінила Рондо, Творча майстерня Аграфіка, Київ, 2015.

の死亡についての『私のおじいちゃんはサクランボの木だった』⁹⁹がその証拠である。直接政変や戦争、クリミア併合をテーマにしていないが、クリミアを舞台にした作品もある。カテリナ・シュタンコ(Катерина Штанько)の『龍たち、行け!』¹⁰⁰という児童文学がそうだ。クリミア出身の有名なイラストレーターの初めての本で BBC の賞も受けた。この本ではクリミアのヤルタ植物園で生物学に夢中の男の子がナシを食べて、その芯をキエフに持って帰って植える。そうすると不思議な植物が出てきて、それが話せる龍とわかり、そこからいろんな面白い出来事が始まる。ある意味でウクライナのハリー・ポッターとも言えるかもしれない。

結びとして

ウクライナが独立してから現在までの 27 年間の文学のことを考えると、いくつかのことが言える。まずは、よく考えられたテーマがあって、その中で人の自由、変化する社会の中に起きる社会問題、国の歴史を考えながら自分の家族の歴史、自分のアイデンティティの問題、それからセクシュアリティの問題を考え直している。

1990 年の学生の革命を入れて、これまでウクライナは少なくとも 3 回「革命」を経験してきた。その間、社会的な価値観や様々な「形式」に挑戦しながら様々な時代を乗り越えてきて、短編から長編小説まで幅広い作品が現れるようになった。また、様々な世代が活躍しているおかげで、それぞれの世代の「味」が出てきた。よく売れる何人かの上の世代と自己 PR が上手な下の世代。また外国文学や外国の作家との接触のチャンスが増え、それがウクライナ文学にも影響してきた。そうした中でソ連の経験から離れながら世界、特に西ヨーロッパの文学プロセスにも参加するようになった。そして英語、フランス語、ドイツ語に翻訳されるウクライナ作家も増えた。また、ウクライナの出版社が毎年、フランクフルトをはじめ世界のブックフェアに参加するようになった。翻訳され、外国で出版され、また外国のコンクールで優勝し、田舎者のコンプレックスを乗り越えることもできた。外国に住んで、ウクライナ語でもドイツ語でも作品を書ける、ターニャ・マリヤルチュックのような作家も現れた。そして翻訳の仕事をするウクライナの作家が増えたおかげで、よりセンスが良く、良質な翻訳作品が、ウクライナの読者の手元に届くようになった。そして最近の政変や戦争をベースにして、久しぶりに戦争をテーマにした作品が現れたのも様々な変化のひとつである。

⁹⁹ А. Нанетті. Мій дідусь був черешнею, Видавництво Старого Лева, Львів, 2015.

¹⁰⁰ К. Штанько. Дракони, вперед!, А-БА-БА-ГА-ЛА-МА-ГА, Київ, 2014.